

## 第59回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 1

ふだんのかかわりから始める発達支援～多職種が連携した子育て支援の輪の中で～

## 学校現場での発達支援

— TOSS の指導法が発達障がい児を救う —

榎 田 健 (TOSS 長州教育サークル代表)

私が所属する民間教育研究団体 TOSS (教育技術の法則化) は、授業におけるさまざまな教育技術と教材を開発し続けている。

特別支援教育の大切さが叫ばれ始め、TOSS の教育技術や教材が発達障がい困っている子どもにとって効果があるとわかってきた。

学校生活の80%が授業である。その授業が、わかってできて楽しければ言うことはない。子どもたちは、毎日楽しい学校生活を送ることになる。

しかし、現実はその甘くない。授業がわからなくて面白くないために、教室を歩き回ったり、お喋りをしたりして授業を妨害する子どもがいる。

ほとんどの原因は、教師の授業力不足による。教育技術を学び、授業の原則を知り、それを使いこなす授業技量が身に付いていれば、発達障がい児も授業に集中し学力が向上するのである。

TOSS では、授業の原則10カ条を身に付けるために模擬授業を重ねている。

10カ条を示す。

① 趣意説明の原則、② 一時一事の原則、③ 簡明の原則、④ 全員の原則、⑤ 所時物の原則、⑥ 細分化の原則、⑦ 空白禁止の原則、⑧ 確認の原則、⑨ 個別評定の原則、⑩ 激励の原則

10の原則を知っても授業では使えない。サッカーのルールを知り、上手になる方法を知ってもプロのサッカー選手になれないのと同じである。

プロの教師になろうと思えば、10の原則を実際に使ってみて、先輩から指導を何度も繰り返し受けて身に付けていくしかない。模擬授業は、そのために行う。

もう一つは、支援の必要な子どもでも夢中になり、学力が向上する教材が必要になる。TOSS では、発達障がい児にも有効な教材を数多く作り出してきた。

「五色百人一首」は、負けを認めない子どもにも有効である。「ペーパーチャレラン」は、どの子どもも時間を忘れて夢中になって取り組んでいく。「写し丸くん」は、教室がシーンとなる。「赤ネコ漢字スキル」や「赤ネコ計算スキル」は、どの子どもにもスキルが身に付くように工夫してある。

私は、10年以上「特別支援教育を視野に入れられない学校は、学校ではない」、「特別支援教育を視野に入れられない授業は、授業ではない」と言い続けてきた。

TOSS の教育技術や授業の原則を知り、TOSS 教材を使いこなせば、教室での発達支援は、より効果が上がっていく。

以下に、学校現場での実践をもとに報告する。

私の立場は、校長であり教職最後の年の3学期後半の実践である。

通常校長が授業をすることはない。特別な事情(若い教師への示範授業、複式学級の支援授業、他校からの依頼授業など)が生じたときに授業することもある。

今回は、その特別な事情が生じたのである。

学級が崩壊し、担任が病休になり、算数担当の教師が事故で入院という事態になった。算数の授業をする教師がいなくなり、私にお鉢が回ってきたのである。

どんな学級なのか、である。

① PDD の疑いのある子が、男子5名(1名は医師の診断あり)、女子1名在籍。

② ADHD の疑いのある子が、男子4名在籍。

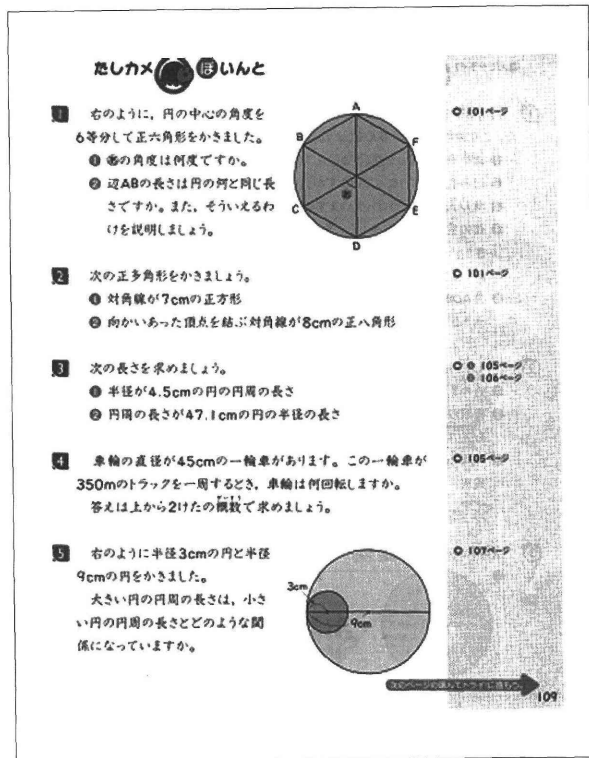


図1 日本文教出版5年下

- ③ 大声で叫んだり担任に反抗したりして授業を混乱させたことのある子8名(男子6名,女子2名)在籍。
- ④ 担任教師の権威がほとんどない状態。
- ⑤ 教師の指導にいちやもんをつける事態が度々生じる。
- ⑥ 担任と支援員の2名体制で授業を実施(学力向上推進教師も協力)。
- ⑦ 理科・書写は教頭, 音楽は特別支援コーディネーター(支援学級担任)が授業を担当。

最初の依頼は「算数の授業をしてほしい」である。教材は、図1で示した教科書1ページ分である。単元の復習でありまとめの問題である。

条件は、次の4つである。

- 1. 45分ですべての問題をやり終える
- 2. 全員がすべての問題をやり終える
- 3. 全員が集中する
- 4. 空白の時間を作らない

つまり、一人の例外もなくこの問題に集中する授業をしてほしいという依頼である。

この条件をクリアすべく考え続けた。

そして、車を運転中に思いついたのが次の方法である。

- (1) 模範解答を作る
- (2) そっくりそのまま写させる
- (3) 自分でやりたい子はやらせる

3学期の後半の確かめ問題である。

「ノートにやりなさい」の指示でやれる子は1/3, 支援をしてヒントを出せばやれる子が1/3, 残りの子はほとんどできない子たちである。何もできない子たちをどうするかである。

模範解答を写すしかない、写すのであれば何とか集中するであろうと思ったのである。

模範解答をどのように子どもたちに示すかが次の課題である。

プリントで示すのか、黒板に書いて示すのか、それとも・・・。

考えた末に、子どもたちの使っている TOSS ノートに書いてそれを印刷することにした。

それが図2である。日付, 課題, 番号なども手書きにした。何行空けるのか, 何行空けるのか, 漢字の使い方や直線の引き方にまで気を配った。5ページ分の模範解答を作った。

なぜノートに模範解答を書いたのか。

算数が嫌いのでできない子どもたちは、黒板に書かれ

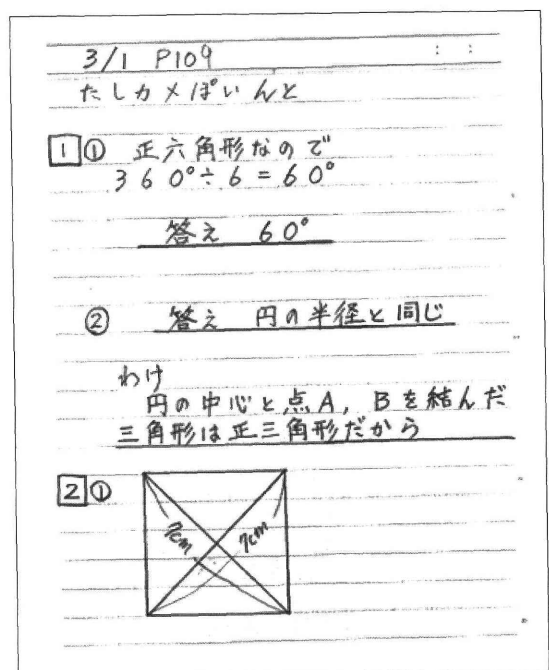


図2 模範解答

た解答をノートに写すことができないのである。

教師が「ノートに写さない。」と指示しても、ノートのどこに写すのか、どこから書き始めていいのかわからないのである。

ノートの使い方そのものの指導を受けていない場合が多いのである。

だから、ノートに模範解答を書いてその通りを写させれば、できるのである。

授業は、次のように進めていった。

- ① 5 ページ分を児童数印刷し長机に置いた。
- ② 1 枚ずつ取って、問題を読んでわからなかったら模範解答をその通りに写しなさい、と指示した。
- ③ 模範解答なんか知らない、自分で解く、という子はそれでよい。
- ④ 1 枚が終わったら、見せに来させる。
- ⑤ 合格したら、2 枚目を取って同じようにやらせる。
- ⑥ やり終えた子のためにペーパーチャレラン(図3)を用意しておく。空白の時間をなくすためである。空白の時間を作ると騒ぎ始める子が多くなる。

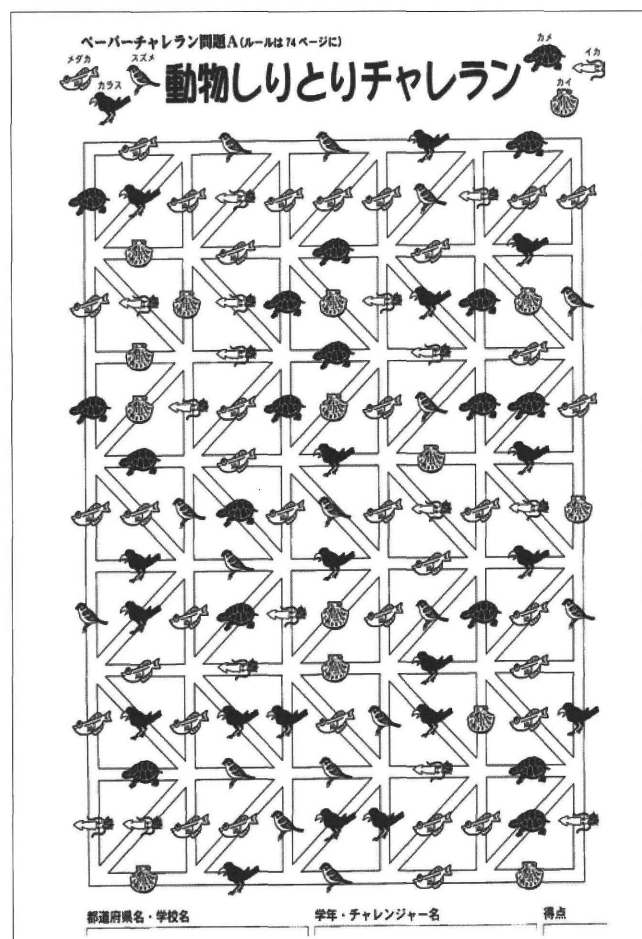


図3 一種の学習ゲーム

授業をやり終えての感想

予想以上の効果に驚いている。

30名全員の子どもたちが、45分飽きることなく集中した。

完全に自分だけでやり通した子は2名であった。

その通りに写すことさえ難しかった子も2名いた。その子には、ノートに赤鉛筆で薄く書いてあげてそれをなぞるように言ってやらせた。

授業が終わって、算数大嫌いの女の子がやってきて嬉しそうに言った。

「校長先生、初めて算数の問題が全部できました。マルがもらえてうれしかったです。算数って楽しいですね。」

その後、この方法で10時間ほど授業を行った。授業中子どもたちが騒いだり、席を離れたりすることはなかった。

最後に、困り感のある子どもが集中して取り組む算数授業の一つとしての条件を示しておきたい。

- ① お手本（模範解答）を子どもが使うノートと同じノートに作り印刷する
- ② そっくりその通りに写すように言う
- ③ 自分でやれる子は、お手本を見る必要はない
- ④ お手本に慣れるまで止めない
- ⑤ 子どもが、もうお手本はいらぬと言うまで待つ
- ⑥ 学級の中に一人でもお手本を必要とする子がいる以上、お手本は作り続ける
- ⑦ 授業は、「教えて、やらせて、認めて、褒めて、励ます」ようにする

その結果として、無駄話もせず、立ち歩きもせず、集中して取り組む授業になっていく。ともすれば「写すこと」が軽視されがちである。先人たちが、大切にしていた教育文化を守りながら前に進みたいものである。